全日本クラブ野球

新人エースが奮闘

箕島球友会V 日本選手権へ

西川忠宏監督（中央）を胴上げして喜ぶ和歌山箕島球友会の選手たち
＝埼玉県所沢市の西武プリンスドームで、猪飼健史撮影

栄光は三たび箕島に――。第40回全日本クラブ野球選手権大会（毎日新聞社、日本野球連盟主催）は最終日の7日、西武プリンスドーム（埼玉県所沢市）で準決勝、決勝があった。西近畿代表の和歌山箕島球友会は準決勝で千葉熱血MAKING（関東・千葉）にサヨナラ勝ち。決勝は昨年の覇者、茨城ゴールデンゴールズ（関東・茨城）に逆転勝ちし、2年ぶり3回目の優勝を果たした。チームからは、大会で3勝を挙げた新人の寺岡大輝投手が最高殊勲選手賞、平井徹選手が首位打者賞に輝いた。箕島球友会は10月26日から京セラドーム大阪（大阪市）で行われる社会人野球日本選手権に出場する。【高橋祐貴、矢倉健次】

箕島球友会の西川忠宏監督は大会前から、目標を「優勝して、日本選手権出場」と公言してきた。全国の強豪クラブチームが集うこの大会で優勝するのは大きな名誉。だが、既に過去2回頂点に立ち、企業チームも加わった大会で真の日本一を争いたいという思いはチームにも周囲にも強くなっていた。

自信はあった。その支えは寺岡投手の成長。小学校2年で野球を始めた。投手一筋だが、福井工大付福井高では森本将太投手（オリックス）の控え、大産大でも2番手だった。

「ここまで頑張った野球を中途半端に終わらせたくない。もう一花咲かせたい」。声をかけられた箕島球友会に今季、迷わず進んだ。

140キロを超える直球とスライダーが武器。社会人1年目の今季は制球に磨きをかけ、同期入部の桐原勇人投手らと競い合いながら力を伸ばした。投球が一本調子に陥りがちなところが難点だったが、5月にチェンジアップを覚えて幅が広がった。

3日連投となった決勝は疲労もあったが、球速は終盤も衰えず、先制を許しながら粘って2失点で完投。「エースの自覚を背負って投げた試合で、チームを優勝に導けて正直ほっとした」。ウイニングボールは応援に駆けつけた父の博幸さんと母の葉子さんに手渡し、「ここからが本番」と気を引き締めた。

箕島球友会にとって4回目の挑戦となる日本選手権。これまで3度はね返された企業チームの厚い壁を打ち破るための切り札が、ようやく現れた。

▽準決勝
千葉熱血MAKING
000000000／3
012000000／4
和歌山箕島球友会
（千）中山、樫尾―宮沢（和）
桐原、北面―水田▽本塁打
渡辺、鷲崎（千）▽二塁打
宮沢（千）水田（和）

▽決勝
茨城ゴールデンゴールズ
100010000／2
000003400X／7
和歌山箕島球友会
（和歌山箕島球友会は2年ぶり3回目の優勝）